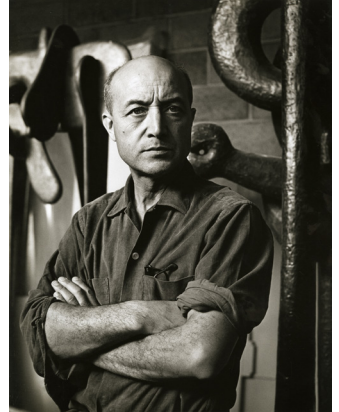


Immediate Press Release 2018.06.13

## イサム・ノグチ —彫刻から身体・庭へ— Isamu Noguchi: from sculpture to body and garden

謹啓 初夏の候、益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。平素は、東京オペラシティ アートギャラリーの活動にご理解を賜り厚くお礼申し上げます。

当館では2018年7月14日 [土] より展覧会「イサム・ノグチ —彫刻から身体・庭へ—」展を開催します。イサム・ノグチ (1904-88) は、詩人・野口米次郎とアメリカ人の母親のもとに生まれ、世界文化を横断しながら生き、彫刻をはじめ舞台美術や家具、照明器具「あかり」のデザイン、陶芸、庭、ランドスケープ・デザインまで、幅広い巨人的な制作を行いました。本展は、ノグチが抽象彫刻の分野にあっても常に「身体」を意識し続けたことや、そうした意識が、子供のための遊具デザインやランドスケープといった人間をとりまく環境へ向かい、ノグチ自身がいう「空間の彫刻」＝庭園への情熱に拡大していったことに着目します。若き日に北京で描いた毛筆による身体ドローイング、モダンダンスの開拓者マーサ・グラハムのための舞台装置、日本で制作された陶作品や光の彫刻「あかり」のデザイン、さらに《チェイス・マンハッタン銀行プラザのための沈床園》(1961-64) など庭園、ランドスケープの模型・資料・動画、そして晩年の峻厳な石の彫刻まで、多様な作品を通して、「異文化の融合」や「生活と環境の一体化」をめざしたその活動の全容に迫ります。つきましては、本展を貴媒体で是非ご紹介いただきたく、ご協力のほど願ひ申し上げます。 謹白




イサム・ノグチ  
©The Isamu Noguchi Foundation and Garden Museum, New York / Artist Rights Society [ARS] - JASPAR. Photo by Jack Mitchell.

### 【開催概要】

展覧会名: イサム・ノグチ —彫刻から身体・庭へ—  
会期: 2018年7月14日 [土] — 9月24日 [月]  
会場: 東京オペラシティ アートギャラリー  
開館時間: 11:00 — 19:00 (金・土は11:00 — 20:00、入場は閉館30分前まで)  
休館日: 月曜日 (祝日の場合は翌火曜日)、8月5日 [日・全館休館日]  
入場料: 一般 **1,400** (1,200) 円 / 大・高生 **1,000** (800) 円 / 中学生以下無料

- \* 同時開催「収蔵品展063 うつろうかたち—寺田コレクションの抽象」、「project N 72 木村彩子」の入場料を含みます。
- \* 収蔵品展入場券200円 (各種割引無し) もあり。
- \* ( ) 内は15名以上の団体料金。その他、閉館の1時間前より半額、65歳以上半額。
- \* 障害者手帳をお持ちの方および付添1名は無料。
- \* 割引の併用および入場料の払い戻しはできません。

お問合せ: 03-5777-8600 (ハローダイヤル)  
ウェブサイト <http://www.operacity.jp/ag/exh211/>  
 <https://www.facebook.com/tocag>

主催: 公益財団法人 東京オペラシティ文化財団、読売新聞社、美術館連絡協議会  
特別協賛: ジャパンリアルエステイト投資法人  
協賛: ライオン、大日本印刷、損保ジャパン日本興亜  
企画協力: The Isamu Noguchi Foundation and Garden Museum, New York イサム・ノグチ庭園美術館 (ニューヨーク)、公益財団法人イサム・ノグチ日本財団 イサム・ノグチ庭園美術館  
協力: 日本貨物航空、日本航空、日本通運  
後援: アメリカ大使館

■イサム・ノグチ —彫刻から身体・庭へ— リリースに関するお問い合わせ  
東京オペラシティ アートギャラリー 【展覧会担当】 福士 【広報担当】 吉田  
Tel: 03-5353-0756 / Fax: 03-5353-0776 / Email: ag-press@toccf.com

## 【見どころ】

- ◎ イサム・ノグチ没後30年を迎える今年、世界市民として生きたノグチの制作に焦点をあてる展覧会。本格的なノグチの回顧展は国内12年振り!
- ◎ ノグチの作品と身体性への問いを軸に、海外・国内の80余点で活動の全容を紹介。
- ◎ ノグチの領域横断的な活動の拡がりにも様々な角度から光を当て、歴史や伝統と向き合い、生活や社会を含めたノグチの総合的ビジョンを明らかに。
- ◎ キーワードは身体・重力・大地、そして人間の歴史、生活、社会に機能する彫刻作品を目指したノグチの創造活動。
- ◎ ノグチの芸術の出発点となる「北京ドローイング」8点を国内初本格的に紹介。
- ◎ 庭・ランドスケープなど大地と地形を読む、地球環境的規模で考えられた作品を模型、資料、そして撮り下ろし動画で立体的に紹介!
- ◎ 異文化の融合を夢みて、世界文化の編集者として歩んだノグチの素顔も豊富なアーカイブ・フォトで紹介。

## 第1章 身体との対話

この章では、身体性への問いかけがノグチの制作において重要であったことを、彫刻やドローイング、舞台美術など、主に初期の作品を通して紹介します。

### 【北京ドローイング】

ノグチは20代前半にパリに留学、20世紀彫刻の開拓者コンスタンティン・ブランクーシに師事して抽象的な造形を学びましたが、20代の半ばに北京に滞在した際には、毛筆と墨による身体素描の大作「北京ドローイング」を数多く手掛けています。力強く大胆な線が、身体のボリュームやエネルギー、そして運動感覚を見事に捉えています。制作の根本につねに身体性への問いかけをはらむノグチ芸術の出発点です。本展では国内初の試みとして8点の作品を一室に展示します。

### 【マーサ・グラハムとのコラボレーション】

1930年代半ば以降、ノグチは舞台美術を活発に手掛け、特にモダンダンスの開拓者マーサ・グラハムとの30年以上にわたるコラボレーションは、身体の動きと空間の関係を結びつけることにおいてノグチに深い示唆を与えました。ノグチの舞台関係の仕事や、彫刻、ドローイング、映像等から紹介します。

## 第2章 日本との再会

ノグチは、戦後、1950年に来日して以降、日本の暮らしや伝統、歴史や社会と向き合いながら、建築家の谷口吉郎、陶芸家の北大路魯山人ら多くの芸術家たちと交流し、新たな制作に取り組みます。彫刻のみならず、家具や照明のデザイン、建築インテリア、庭園などジャンルを超えた多彩な活動にそれは結実しました。この章では、ノグチが日本との再会を果たした1950年代の活動より、社会や生活の中に彫刻として機能する作品を生み出そうとしたノグチの総合的なビジョンを紹介します。

### 【陶作品にみる「日本」との再会】

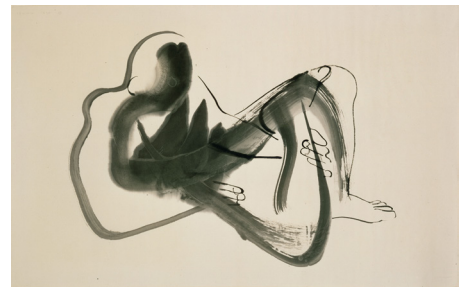
来日中、映画スター山口淑子との結婚を機に移り住んだ、北鎌倉の北大路魯山人の敷地内のアトリエなどで、ノグチは陶作品の制作に没頭しています。日本の風土や埴輪などに触発された素朴で大らかな造形は、現代人が忘れた生命の輝きに満ちています。ノグチの陶作品は、日本でのみ制作されていることから、ノグチにとって、自らの第二のルーツ「日本」と向き合うための方法だったのかもしれませんが。

### 【建築家とのコラボレーションで深めた「総合」への眼差し】

来日早々、建築家の谷口吉郎と協力してノグチが手掛けた慶応義塾大学の《萬來舎》(1950-51)は、建築、インテリア、工芸、彫刻、庭を含む総合的造形空間です。モダンであり、かつ日本の伝統的な素材もふんだんに使った《萬來舎》は、慶応義塾で長く教えた亡き父、詩人・野口米次郎の記念室であるとともに、多くの戦没学生を慰霊するモニュメントでもありました。この章では、同時期の原爆慰霊碑など広島関連の仕事とともに、こうした「彫刻」を歴史や社会と結びつける取り組みを紹介します。

### 【光の彫刻「あかり」の誕生】

ノグチは岐阜県を訪れた際、当地の伝統的な灯籠に触発され、光の彫刻「あかり」をデザインしました。現在も照明器具として多くの人々に愛されており、日本の伝統に触発されながら生活と芸術のつながりを求めたノグチの作品の普遍性を示すものとなっています。



イサム・ノグチ《北京ドローイング（横たわる男）》1930 インク、紙  
イサム・ノグチ庭園美術館（ニューヨーク）  
©The Isamu Noguchi Foundation and Garden Museum, New York / Artist Rights Society [ARS] - JASPAR. Photo by Kevin Noble.



イサム・ノグチ《マーサ・グラハムの舞台「ヘロディアド」のための舞台装置》1944  
©The Isamu Noguchi Foundation and Garden Museum, New York / Artist Rights Society [ARS] - JASPAR. Photo by Arnold Eagle.



イサム・ノグチ《別嬪さん》1952 陶（瀬戸）、麻  
イサム・ノグチ庭園美術館（ニューヨーク）  
©The Isamu Noguchi Foundation and Garden Museum, New York / Artist Rights Society [ARS] - JASPAR. Photo by Kevin Noble.

### 第3章 空間の彫刻—庭へ

ノグチ最晩年に至るまで長く手掛けられた庭や公園、ランドスケープなど、大地を素材とする「彫刻」作品を紹介します。ノグチの地球環境的規模の作品の構想はごく早くから始まっていますが、1960年代以降、多くのプロジェクトを実現させました。ノグチの庭の仕事は「彫刻」を「大地」に結びつける試みであり、同時にそれは、重力によって大地に縛りつけられた人間の「身体」と向き合うことでもありました。

#### 【ノグチの庭と世界文化】

ノグチの環境的作品は、日本の禅の庭、そして世界中を訪ねて出会った石の遺跡など、古今東西の文化にインスピレーションを受けて生まれています。ノグチは世界文化の編集者でもあったのです。《チェイス・マンハッタン銀行プラザのための沈床園》(1961-64)は、日本庭園にみる静寂な佇まいに人々の憩う空間を創出しています。

#### 【遊具と大地】

「原始、人がそうしたように、子どもたちにも直接、大地と向き合ってもらいたい」と、ノグチは庭に置く遊具も制作しました。《オクテトラ》は、八面体に球体状のヴォイド(空虚)を穿った遊具、プレイ・スカルプチャーで、その幾何学性には、無二の親友だった発明家・思想家バックミンスター・フラワーからの影響もうかがえます。

### 第4章 自然との交感—石の彫刻

ノグチの後半生を代表するのは、大理石よりも硬い玄武岩、花崗岩などによる峻厳な石の彫刻です。シンプルなフォルムを基本に、ときに自然のままの石の表情をたたえた作品群は、従来の彫刻の概念を超えています。石はノグチにとって、たんに自分の求める形を実現するための素材ではなく、地球の悠久の歴史や自然の摂理を語る根源的な物質でした。ノグチはそこに、大地に刻まれた「時間」に人を誘う深い魅力を感じとっていたのです。石の彫刻は、庭の仕事と両輪となって、人間の心と身体を改めて大地にしっかりと結びつけ、空間や時間へと広げて思索する、大らかで豊かな作品世界を実現させたのです。

#### 【和泉正敏との出会いと牟礼の仕事場】

ノグチは1964年、香川県の石の町、牟礼町(現・高松市牟礼町)で若き石工和泉正敏(1938-)と出会い、以後、和泉を制作の重要な協力者とし、牟礼をニューヨークとならぶ制作の拠点としてゆきます。ノグチは、和泉の石匠としての知識と技術に助けられ、様々なアイデアとインスピレーションを得たのです。ノグチは和泉とともに牟礼の仕事場と周囲を彫刻庭園に作りかえ、これらは現在、「イサム・ノグチ庭園美術館」としてノグチ生前のままの姿で公開されています。



イサム・ノグチ《萬來舎》1950-51 (2003解体/一部移設)  
©The Isamu Noguchi Foundation and Garden Museum, New York / Artist Rights Society [ARS] - JASPAR. Photo by Chuji Hirayama.



イサム・ノグチ《あかり》デザイン1953～ 紙、竹、金属  
香川県立ミュージアム



イサム・ノグチ《チェイス・マンハッタン銀行プラザのための沈床園》1961-64  
ニューヨーク  
©The Isamu Noguchi Foundation and Garden Museum, New York / Artist Rights Society [ARS] - JASPAR. Photo by Arthur Levine.



牟礼の仕事場で和泉正敏と制作中のノグチ 1970頃  
©The Isamu Noguchi Foundation and Garden Museum, New York / Artist Rights Society [ARS] - JASPAR. Photo by Michio Noguchi.



イサム・ノグチ《アーケイック》1981 玄武岩  
香川県立ミュージアム  
©The Isamu Noguchi Foundation and Garden Museum, New York / Artist Rights Society [ARS] - JASPAR. Photo by Akira Takahashi.



イサム・ノグチ《オクテトラの模型》1968 石膏、彩色  
イサム・ノグチ庭園美術館 (ニューヨーク)  
©The Isamu Noguchi Foundation and Garden Museum, New York / Artist Rights Society [ARS] - JASPAR. Photo by Kevin Noble.

[イサム・ノグチ略年譜]

- 1904 詩人野口米次郎を父に、編集者レオニー・ギルモアを母に  
ロサンゼルスに生まれる。父はイサムが生まれる前に日本に帰国。
- 1906 母とともに来日。12年ほど日本で過ごす。
- 1918 インディアナ州の実験校に入学するため単身渡米。
- 1927 パリに留学し、彫刻家ブランクーシのアシスタントとなる。
- 1930 シベリア経由で北京に赴く。
- 1931 再来日し、約8ヶ月滞在。京都で禅の庭園や埴輪に感銘を受ける。
- 1942 第二次大戦下、アリゾナ州の日系二世強制移住キャンプに志願して入所。
- 1949 世界10カ国以上の石の遺跡を訪ねる旅を始める。
- 1950 19年振りに来日し、日本の芸術家たちと交流。以後、日米欧を行き来して制作。
- 1952 北鎌倉の北大路魯山人の敷地内の日本家屋で陶作品の制作に没頭。
- 1958 発明家・思想家バックミンスター・フラーの弟子で建築家のジョージ・サダオ（1927-）が制作協力者に。
- 1964 香川県牟礼町の石工、和泉正敏（1938-）と出会う。以後、和泉を制作協力者に、牟礼をニューヨークとならぶ制作の拠点として行く。
- 1985 ニューヨークのアトリエを改造し、イサム・ノグチ庭園美術館（ニューヨーク）として開館。
- 1988 ニューヨークで逝去。
- 1999 牟礼のアトリエ、庭園がイサム・ノグチ庭園美術館として開館。
- 2005 最晩年に基本設計を手掛けた《モエレ沼公園》が札幌市にオープン。



イサム・ノグチ 《空間のうねり# 2》1968 アフリカ産花崗岩  
イサム・ノグチ庭園美術館（ニューヨーク）（公益財団法人イサム・ノグチ日本財団に永久貸与）  
©The Isamu Noguchi Foundation and Garden Museum, New York / Artist Rights Society [ARS] - JASPAR. Photo by Michio Noguchi.



イサム・ノグチ 《無題》1987 インド産花崗岩  
イサム・ノグチ庭園美術館（ニューヨーク）（公益財団法人イサム・ノグチ日本財団に永久貸与）  
©The Isamu Noguchi Foundation and Garden Museum, New York / Artist Rights Society [ARS] - JASPAR. Photo by Akira Takahashi.

[関連イベント]

## 開催記念トーク

### 「コラボレーターが語るノグチの制作の現場と“未来への贈り物”」

日時	2018年7月14日 [土] 12:00 開場 13:00 開始 15:00 終了 (予定)
登壇者	和泉正敏 (石彫家、公益財団法人イサム・ノグチ日本財団理事長) ショージ・サダオ (建築家、イサム・ノグチ庭園美術館 [ニューヨーク] 名誉理事) 聞き手：新見隆 (大分県立美術館館長、本展監修者)
会場	パークタワーホール (東京都新宿区西新宿 3-7-1 新宿パークタワー 3階)
定員	200名
お申し込み	要事前申込 リビングデザインセンター OZONE ホームページより受付フォームにてお申込みください。 <a href="https://www.ozone.co.jp/pro/seminar/detail/584">https://www.ozone.co.jp/pro/seminar/detail/584</a>
参加費	一般：1,000円 東京オペラシティ Arts 友の会会員、CLUB OZONE プロフェッショナル会員 (コース、法人含む) は無料
主催	公益財団法人 東京オペラシティ文化財団、リビングデザインセンター OZONE
お問い合わせ	リビングデザインセンター OZONE Tel : 03-5322-6500 (代) 10:30-19:00 / 水曜日休館 (祝日除く)

[登壇者プロフィール]

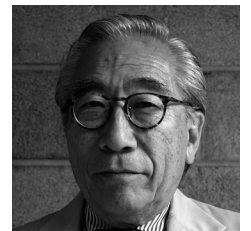
#### 和泉 正敏 (いずみ まさとし)

石彫家。公益財団法人イサム・ノグチ日本財団理事長。1938年香川県牟礼町に生まれる。1953年石の仕事を始め、1964年「石のアトリエ」設立。同年イサム・ノグチと出会い、25年間、制作活動に協力。ノグチの代表作《黒い太陽》(シアトル美術館)、《つくばい》(最高裁判所)、《天国》(草月会館)などを共同制作し、牟礼の庭園美術館作りにも協力。ノグチ没後、遺作《タイム&スペース》(高松空港)、《ブラック・スライド・マントラ》(札幌大通公園)、《プレイ・マウンテン》(札幌モエシ沼公園)などの完成に携わりながら、自らの制作活動を行う。カナダ大使館、東京オペラシティ、新国立劇場、京都迎賓館、経団連会館など建築家との仕事も多く、自身の作品に《島たち》(シカゴ美術館)、《無為・無不為》(台湾國立故宮博物院屋外彫刻)など。2018年、東京ミッドタウン日比谷に石彫《明》を完成。



#### ショージ・サダオ (Shoji Sadao)

建築家。イサム・ノグチ庭園美術館 (ニューヨーク) 名誉理事。1927年ロサンゼルス生まれ。コーネル大学に建築を学びバックミンスター・フラーに師事、フラーを通してその親友であるイサム・ノグチと出会う。1954年にフラーと共同制作を始め、1967年のモントリオール万博アメリカ館のための巨大なジオデシック・ドームをはじめ、数々の主要プロジェクトに協力。1958年にはノグチのアルミニウム板による彫刻制作に協力し、1960年代以降、デトロイトの市民センター広場《フィリップ・A・ハート・プラザ》、カリフォルニア州コスタ・メサの彫刻庭園《カリフォルニア・シナリオ》などノグチの庭やランドスケープの主要なプロジェクトに協力、また光の彫刻「あかり」の製造と普及にも協力。イサム・ノグチ庭園美術館 (ニューヨーク) の設計と建設に協力し、1991-2003年、イサム・ノグチ財団の常任理事を務めた。



#### 新見 隆 (にいみ りゅう)

大分県立美術館館長。武蔵野美術大学造形学部教養文化・学芸員課程教授。1958年、広島県尾道生まれ。慶応義塾大学文学部仏文科卒業。専門は美術史、デザイン史、美術館学。1982-99年、西武美術館・セゾン美術館学芸員として『日本の眼と空間』『イサム・ノグチと北大路魯山人』『デ・ステイル1917-1932』など数々の伝説的な展覧会を企画。同美術館閉館後はフリーランス・キュレーターとして『ウィーン工房1903-1932—モダニズムの装飾的精神』などを手掛け、同時に武蔵野美術大学教授として後進を指導、2013年からは大分県立美術館館長。著書に『空間のジャポニズム—建築・インテリアにおける日本趣味』(INAX、1992)、『イサム・ノグチ 庭の芸術への旅』(武蔵野美術大学出版局、2018)など。コラージュ、人形、焼きもの、食の絵のスケッチで個展も。

